

コミュニケーションな文法課題 ——基礎文法科目での実践とe-Learningとの関連——

松原 知子

1. はじめに

本稿では、文法学習のための課題について、大学の基礎英文法科目でデジタル教材の補足として使用した印刷教材を例に、考察する。

2004年度から現在に至るまで、筆者は、e-Learningを利用した英文法の選択科目を担当している。この科目は、英語の基礎的な文法を確実に身につけさせることを主な目標としており、初期は大学のWBTシステムを利用して、近年は企業が提供するクラウド型システムを利用して、問題と解説を提供してきた。各品詞、時制、法、態などの文法項目ごとに分類された大学入試レベルの多量の問題に取り組むことによって、各学生が自分に不足している知識を補い、より文法に即して英文の意味を解釈したり書いたりできるようになることが期待できた。しかしながら一方で、e-Learningの欠点も見えてきた。その欠点を補うため、A4判1枚両面に印刷した課題を宿題として提出させることにした。現在では、半期に9種類の課題を提出させている。以下では、このような課題を導入するに至った経緯から話を進める。

2. 英文法学習の必要性

2.1 中学・高校での英文法

大学生の英語力には、入学試験によるスクリーニングを経ているにもかかわらず、大きな差が見られる。文法に関する知識や運用能力も例外ではない。これは、中学・高校での英語教育のあり方の影響が大きいと思われる。

中学校で新しい文法項目を指導する場合に、よく用いられる手法として、PPPあるいはPCPPと呼ばれるものがある。始めに教師がいくつかの使用例を提示(Presentation)し、生徒に文法規則を理解(Comprehension)させ、それを型どおりに適用する練習(Practice)をし、その後、話したり書いたり(Production)する。これは、学習者に不安感を抱かせずに産出活動に

まで進められる方法として、日本の学校に適した指導法だと考えられている。日本では英語に接する機会が限られているため、文法はこのように演繹的に、規則の理解、規則の適用と応用の練習、という順番で学ぶのが一般的である。

ただし、一度の指導でその文法規則を適切に使えるようになるとは考えにくい。運用力をつけるためには、多くの使用例に出会い、自らも使うことで慣れる必要があるが、日常的に英語を使わない環境で生活していることに加えて、文法項目の中には、規則に細目や例外が多いものや、あまり頻繁には使われないものもある。また、英語学習の初期に学んだ文法項目は、体系的に整理されず、混乱したり忘れられたりする可能性がある。そのため、単純な場面では使えても、他の文法要素が加わるなど、複雑になると使えないといった問題が起こりやすい。文法の知識が必要な時に確実に適用できるようにするためには、文法を意識させ、文法を体系的にとらえなおすことも効果があると思われる。

現在、中学・高校の英語科の授業には「英文法」という科目がない。いっぽうで塾などの学校外機関や自習教材では、文法に焦点が当てられることが多い。このような状況下では、文法の知識や運用力に大きな個人差が生まれても不思議ではない。大学にはこのような英語教育を受けてきた者が入学してくるということを承知しておきたい。

2.2 大学での文法指導

学習指導要領に従えば、主な文法項目の指導は高校初級レベルで終わると考えられる。したがって大学の英語の授業は、学生が既に主要な文法規則を身につけているという前提で、実践的な運用を中心にすることもできる。しかし実際には、文法的にはほぼ問題のない英文を書いたり話したりできる学生がいる一方で、主語や動詞の無い文を書いたり、文構造を把握できずに文を正しく解釈できなかつたりする学生も少なくない。このような学生たちに、より確実な文法の知識や運用力を身につけさせるためには、それぞれの学生に不足している知識を、それぞれの学生に合ったペースで効率よく補足できるシステムが必要である。個別に多量の問題に取り組ませることのできるe-Learningは、このような学生集団の学習形態として適していると言える。

3. デジタル教材の実際

3.1 概要

英文法の教材は、多くの場合、文法項目によって分けられている。文法を網羅的かつ体系的に学ぶためには、効率の良い進め方である。

筆者が最初に担当した科目では、市販の『ロイヤル英文法問題集』を大学内のWBTシステムに移植して利用した。『ロイヤル英文法問題集』は文法書『ロイヤル英文法』に準拠しており、文法項目に従った章立てになっている。大学のシステム変更に伴って、現在は、チエル株式会社のクラウド型教材『英文法徹底トレーニング』を採用している。これも文法項目による章立てだが、項目数が少なく、全問題数は『ロイヤル英文法問題集』の約3割(550問)であり、半期科目に適している。大学のシステムが学内専用であったことを除いて、受講方法はほぼ同じである。学習者は個々にオンラインで問題を選び、解答し、解答は自動採点される。採点結果は、教員も画面上で見たり、一覧をダウンロードしたりできる。学生は採点後の画面で問題文の日本語訳や解説が見られるが、それに加えて教員は、より基礎的な要点や間違いやすい点について解説を書き、メールや大学の掲示システムを利用して提供している。

3.2 オンライン受講の促進

e-Learningは、各学生の好きな時間に、多量の問題に、好きなだけ時間をかけて、教室外でも取り組めることが特長である。しかし一般に、学習者の意欲を保つことが困難で、ドロップアウトが多いことが問題とされる。期末に成績評定をするという現実的な制約がある場合、学生が確実に学習を進められるように、学習を促す仕組みが必要である。

大学のWBTシステムは、教員が教材の編集や設定を自由に行うことができたため、受講可能期間を制限した。期間が制限されていれば、学生は期間内に受講するだろうと考えたが、期限までに受講を終えられない学生が、毎年かなりの割合に上った。そのため再受講期間を設けたり、年度ごとに期間の制限を緩くしたりしていった。いっぽう現在の教材は企業の管理下にあるため、教員が受講期間を制限することはできない。いずれの場合も、オンライン受講を促すためには、受講期間の制限以外の手段を取り入れる必要があった。

4. 紙ベース補足教材の必要性

授業でe-Learningを利用する場合、オンラインでの個別学習とは異なる学習形態、とくに教室での講義や協同学習を組み合わせるブレンド型学習が行われることがある。定期的に教室に集まることで意識を高め、学習ベースの維持が容易になる。ただしそれはe-Learningの特長を相殺することにもなりうる。

当該科目を開講した年に行われた学生アンケート調査では、成績上位群の学生には「毎週やる課題が決まっている」「課題を好きな時にできる」「文法を集中的に学べる」ことを好み、対面授業の必要性を感じていない傾向が見られた（田辺他(2004) 197、田辺他(2006) 167）。つまりe-Learning科目は、一人でじっくり課題に取り組みたいという学生の性向に合っていることがわかった。このような学生にとって、対面授業での一斉指導や協同学習は、この科目に対する意欲を減退させることにもなりかねない。

しかしながら、オンライン受講のみの授業にも問題がある。文法規則や文法用語の知識が非常に少ない学生は、問題の正解や解説を読んでも理解できず、応用が利かない。多量の問題をこなすのが困難だけでなく、それによって得られる知識や能力が少ないと思われる。上記のアンケートでは「自習ではわからないことがあった」という回答が多かったにもかかわらず、実際に学生が教員に対してオフィスアワーやメールを利用して質問することはほとんどなかった。学生の疑問に十分に答えられていないことは明らかであった。いっぽう、英文法についてある程度の知識と運用力がある学生にとって、多量の問題に答えることは大きな負担ではないが、さらに実践的な知識や能力を養うことができない。これらの事態は、学習効果はもちろん、学習意欲の低下にもつながり、受講の進捗にも影響すると思われる。

一人で好きな時にじっくり取り組めるというe-Learningの利点を活かしながら、教員との直接のやり取りによって疑問を解消したい。オンラインでの受講を促す一方で、デジタル教材にはない、より実践的で発展的な課題も学生に与えたい。これらの要求に応える指導形態を模索した結果、紙ベースの宿題が最も簡易で効果的であろうという結論に達した。宿題用紙の配付や提出を教室で行えば、定期的に教員と接する機会ができる。他の学生との接触も増えるので、オンライン受講への意識も高まるだろう。提出された用紙

は、採点や評価をするだけでなく、コメントを書き加えて返却することもできる。特別の注意が必要な学生を発見し、個別に指導することも可能になるだろう。

5. 印刷教材の開発

5.1 理想の教材

学生に取り組ませるにあたり、好ましい課題の条件を挙げてみる。

- ・ 文法用語に関する基礎知識を確認する
- ・ 基礎的な文法規則を確認させる (明示的な知識を含む)
- ・ 文法規則の重要性を認識させる (意味の違いに焦点を当てる)
- ・ 場面や前後関係がある、現実的、コミュニケーション的である
- ・ 単一の文法規則だけでなく、複合的な知識の運用を要求する
- ・ 選択式ではなく、考えだすことを要求する
- ・ 創造力を活かせる
- ・ 達成感を感じさせる
- ・ デジタル教材と関連がある。文法項目に分類できる
- ・ オンライン受講を妨げない。比較的短時間 (1時間以内) でできる
- ・ 扱いやすい。用紙1枚に収まる
- ・ 教員が解答を確認、評価しやすい

これらの条件は互いに矛盾する場合があり、すべてを満たす問題を作るのは不可能である。自由な解答を容認する問題は教員が評価しにくいし、正解が一つに決まらなると達成感を感じにくくなる可能性がある。できるだけ多様な内容の問題を載せることを目指すのが現実的であろう。なお「コミュニケーション」については、「コミュニケーション的なテスト」の3つの要件 (文脈の明示、タスクのオーセンティシティー、テキストのオーセンティシティー) (根岸他7) に、できるだけ合わせることを目指した。

5.2 問題作成

1回の課題は、「1時間以内でできる」、「用紙1枚に収まる」という条件から、A4判1枚のプリントにまとめるのが適切と思われた。問題数が少ないとはいえ、素材をゼロから作り出すのは負担が大きい。そこで、既成の教

材や問題集などからヒントを得ることにした。海外の出版社のESL学習者向け文法テキストには、コミュニケーションな課題が多く、非常に参考になった。

5.3 教材例

以下に問題例を示す。授業では使用しなかったものも含まれる。なお指示文や問題数は実際の出版物や授業で使用した印刷教材よりも簡潔にしてある。また、多くの出題で解答例を示したが、ここでは省略した。

5.3.1 文法用語

文法用語の知識は、「コミュニケーション」の対極にあるが、デジタル教材の日本語解説を理解するうえで必要である。また、用語を意識することは、文法規則についての意識を高めることにもつながる。日本語の文法用語に関する問題は、既成の教材などには見当たらなかったため、文法書の説明を利用して独自に作成した。

文法上の概念を言葉で説明することは難しい。概念を理解している学生も、その定義を厳密には表現できないことが予想されるので、選択式が適切だと思われた。

《例1》 例にならって次の各説明にあてはまる文法用語を選びなさい。

[短縮形、原形、現在形、目的語、補語、使役動詞、知覚動詞、自動詞、他動詞]

1. 文の構成要素の一つで、動詞の動作・作用の対象を表す
2. I amに対してI'm、are notに対してaren't
3. 他の動詞と共に用いて、「(～に) …させる」という意味を持たせる
4. 過去から未来にかけての状態や、習慣的に繰り返す行為を表す動詞の形
5. 目的語を伴って使う動詞

説明の文は、抽象的になりすぎないように言葉を選んだが、上記5のように、ある文法用語の説明に他の文法用語を使わなければならないことがあるなど、問題としての適切性に疑問があった。できれば2のように、具体的な例を挙げて答えさせたい。明示的な説明を避けて例文で出題するならば、たとえば、現在形の例文を示して選択肢の中から「現在形」を選ばせたり(例2)、

例文の中から現在形の動詞を含む文を選ばせたり (例3) することができる。

《例2》 次の文の動詞の形として当てはまるものを選びなさい。

Satomi loves Yomiuri Giants. (1) 原形 (2) 現在形 (3) 過去形

《例3》 次の文章の中から動詞の現在形を含む文を選びなさい。

(1) Satomi's father was a great fan of Hanshin Tigers. (2) He often took her to Hanshin Koshien Stadium with him. (3) Gradually, Satomi has become fond of baseball. (4) She sometimes goes to Tokyo Dome to watch a game. (5) On the other hand, her father started to become more interested in soccer.

しかし、例2で(2)、例3で(4)という正解を答えた学生が、現在形を例1の4.の説明のように「過去から未来にかけての状態」や「習慣的に繰り返す行為」を表すと理解しているとは言いきれない。用語知識の問題としては、説明と用語の結びつきを考えさせることで学生の知識と意識が高まることを期待するほうが現実的だと思われる。

5.3.2 文構造

《例4》 下線の語から述語動詞 (述部の動詞) を選びなさい。

Wilbur and Orville Wright were brothers. At one time they repaired bicycles. But they wanted to fly. First they built gliders. ... (Muschla 12)

述部の動詞を特定する問題に正解できない学生は、文章の読解に大きな困難があるだろうと推測できる。文の根幹である動詞に関する意識を高めるために、是非含めたい種類の問題である。選択肢の設け方 (どの語に下線を引くか) によって、レベルの調整ができる。例4では、flyに下線を引けば、述語動詞とその他の動詞との区別も問える。

《例5》 哺乳類についての説明です。主語と述語動詞を備えた文として成り立っているものを選びなさい。

1. Mammals are found all over the world.
2. Live on land and in rivers, lakes, and oceans.
3. Mammals are warm-blooded and have hair or fur.
4. Mice, for example, tiny mammals. (Muschla 19)

これも文構造の認識力を確かめる問題である。「完全な文」であるか否かを判別させているだけだが、文の主語と述語動詞を指摘させたり、主語や動詞を補って書き換えさせたりすれば、さらに詳細に学生の理解度を確かめられるし、学生自身も文の構造を意識することになるだろう。なおこの問題は、個々の文に関して答えを求めているが、全体で「哺乳類」という共通のテーマがあるため、若林ほか(65)が問題視する煩瑣さが無い点で、好ましい。

5.3.3 動詞の用法

《例6》 与えられた語を使って対話を完成しなさい。動詞は単純現在形または現在進行形にしなさい。

1. A: Does he need help?
B: Yes, he does. (French/ he/ understand/ not)
2. A: What are you doing?
B: (1) (I/ the/ soup/ taste).
A: How is it?
B: (2) (It/ delicious/ taste). (Schoenberg 270)

これは状態動詞の使い方に関する問題である。単語は与えられているが、単なる整序問題でも空所補充問題でもなく、語を補って解答する必要がある。1.はdoesを追加して否定文にすることを、2.は、同じ動詞を主語と意味によって使い分けることを要求している。この問題には、上記の「煩瑣」さが感じられる。とくに1.は、状況が分かりにくい。話者Aの質問の前に“ I hear your father is going to work in Paris.”などの文言で情報を加え、helpを an interpreterに変えれば、もっとコミュニカティブに、答えやすくなる。

5.3.4 法助動詞

使い分けの難しい助動詞については、以下のような練習問題が考えられる。

《例7》 日本語に合うように適切な語・句を選びなさい。

[can't / isn't / may not / must not]

1. It () be true. 「それは本当ではないかもしれない」
2. It () be true. 「それは本当ではないに違いない」
3. It () be true. 「それが本当なはずがない」
4. It () true. 「それは本当ではない」

《例8》 各英文の意味として最も適切なものを選びなさい。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1. It may not be true. | a. 「それは本当ではないかもしれない」 |
| 2. It must not be true. | b. 「それは本当ではないに違いない」 |
| | c. 「それが本当なはずがない」 |

いずれも確かめたい部分を直接問う問題であるが、日本語の表現の違いが微妙でわかりにくい。また場面、状況がないため、現実感がなく、答えにくい。例9と比較してみよう。

《例9》 Answer the questions based on the speakers' opinions of the given situation.

SITUATION: Tim is talking about Ed and says, "Someone told me that Ed quit his job, sold his house, and moved to an island in the Pacific Ocean."

OPINIONS: Lucy says, "It may not be true."

Linda says, "It must not be true."

Hamid says, "It can't be true."

Rob says, "It isn't true."

1. Who is absolutely certain?
2. Who is almost certain?
3. Who has an open mind and hasn't decided? (Azar and Hagen 183)

この問題には状況の説明があり、発言者が明らかになっているため、現実のコミュニケーションに近い感覚が持てる。ただし英語の説明が長く複雑だという難点がある。そこで、絵を併用してみた。

《例10》 場面の説明を読み、質問に答えなさい。

Lucy, Linda, Harry and Rob hear someone say on TV, "Ichiro has quit his job, sold his house, and moved to an island in Okinawa."

Lucy says, "That may not be true."
Linda says, "That must not be true."
Harry says, "That can't be true."
Rob says, "That isn't true."

Ichiro has quit his job, sold his house, and moved to an island in Okinawa. ...

The illustration shows four students sitting around a table, watching a television screen. The screen displays a news report. Each student has a speech bubble indicating their reaction to the news. Linda says, "That must not be true." Rob says, "That isn't true." Harry says, "That can't be true." Lucy says, "That may not be true." A separate speech bubble contains the news report text: "Ichiro has quit his job, sold his house, and moved to an island in Okinawa. ..."

絵で状況を描き、吹き出しに発言内容を書き込んだことで、文章による説明の分かりにくさがかなり解消されたと思われる。発言内のItをThatに変えて、その場の発言を指している感覚を持たせた。固有名詞も、学生が過去に聞いたことのあるものを用いるほうが、文法項目に注意を集中させることができるであろう。

5.3.5 形容詞と副詞

形容詞と副詞については、似た意味や綴りの単語の使い分けや、比較表現を苦手とする学生が多い。語彙は文法の運用力と深くかかわるので、語彙の問題も含めたいと考えた。

《例11》 意味が通るほうの語を選びなさい。

1. I like Japanese pop music better than (classical/ classic) music.
2. I prefer small cars because they are more (economic/ economical).
3. The train was late, so it stopped only (briefly/ quickly) at the station.

形容詞、または動詞の分詞に関する問題によって、現在分詞と過去分詞をもとにする形容詞の使い分けを意識させることも重要だろう。メールや手紙、日記などを完成させる問題は、現実的な場面設定がしやすい。

《例12》 与えられた語を適切な形にして手紙を完成しなさい。

To Whom It May Concern,

I am writing this letter to thank you for the (1. amaze) service my sister and I received at your café last week. That day we were quite (2. depress) about school, so we chose to come to your (3. excite) café. The waiter was a (4. fascinate) man. I am a truly (5. satisfy) customer.

Thank you,
Patty Smith

(Byrne and Charlton 87)

複数の形容詞を限定用法で使う場合の順番については、文法書には表で整理されていることが多いが、意識したことがない学生が多いようだ。順番を示す表と共に、以下のような形式の出題をした。やや不自然になることもあるが、順番に決まりがある、ということを意識させることはできるだろう。

《例13》 各語群の順序を入れ替えて意味のある文を完成しなさい。

1. Last summer, we stayed at a (lodge/ seaside/ new/ nice).
2. The dog had (cute / four / little / new / puppies).

比較については、さまざまな出題形式が可能であるが、基本的には次のようなものが典型的である。

《例14》 Answer the questions in full sentences.

1. Which is heavier: a kilo or two pounds?
2. Who can expect to have a longer life: a man or a woman? (Ur 41)

より自由度を高めて、以下のような形式にすると、楽しめる課題になる。疑問詞も与えれば、難度は低くなる。任意で独自の問答を考えさせれば、書くのを楽しむ学生もいるだろう。

《例15》 Make questions and answers of comparison using the given words.

Answer the questions based on facts.

1. heavy, one kilo, two pounds
2. can expect to have a long life, a man, a woman
3. large, all the planets in the solar system

5.3.6 法

自由度が高く楽しめる問題は、仮定法の課題でも可能だ。

《例16》 次の文の後半を自分の考えで補いなさい。事実に反する条件なのか、可能性のある条件なのかを区別して、助動詞に気をつけて書きなさい。

1. I'll be very disappointed if
2. Japanese college students would learn English much better if
3. If I hadn't passed the entrance exam for this university,

下の問題は課題を個人で行う場合、必ずしも絵が必要ではないが、創造力を使う課題では、絵は大きな助けになると思われる。

《例17》 あなたは海外旅行中に飛行機事故にあい、救命ボートで無人島に漂着しました。島は暖かく、水や食べ物はあるようです。海岸には以下の物が流れ着いています。これらの物の使い道を考えてください。(※「しようと思えば…」という意味を表す条件節が省略されている仮定法を使います。)

a plastic bag a trumpet
a wooden spoon an empty tin can



AN EMPTY TIN CAN



A TRUMPET

(Ur 130)

解答例： We could use the empty tin can as a cup.



A WOODEN SPOON



A PLASTIC BAG

例16と17では、指示文に文法上の注意を入れた。自由度の高い問題では、各問題がどのような知識や能力を試しているか、わかりにくいことがある。学生が、意識すべきところに注意を払って問題に取り組むようにするための配慮である。対面授業では口頭の注意で済むが、印刷物では明記するほうが良いと考えた。

5.3.7 音声問題

紙ベースであってもリスニングの問題を課すことは可能である。例18は文字による出題だが、TOEICなどのように、音声のみで出題することもできるし、リスニングが苦手な学生のために、音声と文字を組み合わせることもできる。仮定法に焦点をあてるなら、仮定法の部分を聞きとらせるのが適切であろう。

《例18》 最も適切な返答を選びなさい。

1. Why didn't you come to the party?

- a. I would have eaten the food, but I was full.
- b. I could have come if I hadn't fallen asleep.
- c. I would help you if I didn't have a cold.

(Robinson, et al. 44)

文法の問題にリスニングの能力が関わるのは不適切と考える人もいるかもしれない。しかしテストではなく、学習の一環としては問題ないだろう。実際のところ、聴き取りができなければ、その文法知識を音声コミュニケーションで利用できないのである。例18の場合、would have、could haveという句が実際にどのように発音されるのかを確かめることは重要である。さらに、聴くことによって文が記憶に残りやすいという点も無視できない。音声

ファイルは大学のサイトを利用して提供することができる。既成のデジタル教材の文法問題にも、ぜひ音声をつけてほしい。

5.3.8 関係詞

文法用語については学生に説明を要求するのは難しいと考えたが、具体的な例文の意味の違いについては、和訳させたり同義文を選ばせたりするより、説明させるほうが的確に問題点を問える場合もある。

《例19》 2文の意味する状況の違いを説明しなさい。

- a. My uncle who lives in Osaka will visit us tomorrow.
- b. My uncle, who lives in Osaka, will visit us tomorrow.

関係代名詞の制限用法と非制限用法の意味の違いを意識させる問題である。最近ではコンマを付けずに書くことも多いが、この例のようにコンマの有無で含意が変わることもある。違いを理解していれば簡潔に状況の違いを説明できるはずだ。答えられない者は、コンマ一つで意味に違いが生まれるということ、この出題によって強く認識することだろう。

6. フィードバックと学生への対応

6.1 学生数が多い場合

デジタル教材は自動採点されるが、印刷教材の採点や評価は教師が行うことになる。デジタル教材の欠点を補うため、記述式の出題が多くなるので、学生数が多いと教員の負担は重くなる。ただ、文法に関する意識を高めることを第一に考えるならば、厳密な採点は必要ない。学習意欲の維持のためには、全体を3～4段階で評価したり、ExcellentやGoodなどの単語で表現したりして、達成感を持たせるように配慮するほうが良いだろう。いっぽう解答の正誤ははっきりさせ、適切な答と、どのような点に注意すべきかをしっかり伝え、教訓帰納（「問題に取り組んだことでわかったことを教訓として引き出す学修方略」）（小湊2）が効果を上げるようにしたい。筆者が担当した科目は、例年40名から80名の履修者がいたため、個々の学生へ向けて詳

細なコメントを書くことが難しかった。そこで、全問題の正解と解説を大学のサイトに掲示したり、印刷して用紙返却時に渡すことにした。こうすれば、多くの学生に共通する問題点については、個々に指摘する必要が無くなる。この解説用紙に載せなかった問題点については、該当する学生の用紙に記入したり、教室で声をかけたりすることで、対応した。

6.2 レベル格差

近年、与えられたデジタル教材の問題に答えることが難しいというレベルの学生がクラスの3%程度の人数おり、そのような学生に対しては、なかなか適切な対応ができていない。他の授業科目も含めて、基礎的な文法運用力に問題があると思われた学生には、中学校1年生向けの問題集などを見て基礎を確認するように伝えるが、それを実行する学生はまれなようだ。他大学の英語教員からは、対面の授業で中学1年レベルからやり直すことで、1年後には市販の大学向けテキストを使用した授業が可能になるという話も聞いた。紙ベースの提出課題には、デジタル教材よりも基礎的な問題も含めていたつもりだが、入門期まで範囲を広げる必要があるようだ。オンライン受講を始める前の準備としての教材提供や対面指導も考えるべきかもしれない。

6.3 定着しない文法項目への対応

好ましい課題の条件として「単一の文法規則だけでなく、複合的な知識の運用を要求する」ことを挙げた。これは、特定の文法項目に焦点を当てた問題だとわかれば注意して答えられるが、それ以外の項目の問題に答える場合は注意を怠ることがあるからである。教材分類上の文法項目とは異なる文法上の問題点が発見されれば、やはりそれなりの対処をするべきである。

たとえば例17では、問題文に含まれている名詞はすべて不定冠詞を伴っているが、解答では定冠詞を使うべきである。冠詞は英語入門時から使っており、デジタル教材でも「名詞」の部分で必ず問題にされるが、上級者でもなかなか自信を持って使えない項目でもある。厳密な採点をしない課題だからこそ、冠詞にも注意するように指示がしやすい。

Soの使い方については、「前の発言に同意して「本当にそのとおりですね」と言うときはSo+主語+動詞（助動詞）で、「～もまた…だ」と言うときはSo+動詞（助動詞）+主語で表す」などの説明や例を載せたうえで、以下

のような問題に答えさせた。

《例20》 レストランでの対話です。各空所に適切な一語を入れなさい。

Anne: I'd love some dessert.

Betty: () () I. (私も) The chocolate cake looks good.

Anne: So () ()! (本当に) OK, I'll take it.

(Fuchs and Bonner 120を改編)

この問題では、直前の相手の発言の主語と述語動詞または助動詞を特定して利用することになるが、それらの単語以外を解答する学生がいる。そのような学生は、文構造を確認する問題をやり直すべきだが、e-Learning教材には、ここで確認させたい文構造や文構成要素に関する問題がない。提出課題は、オンライン受講を促すために配付や提出の日程が決められており、前の課題を繰り返す学生には個別に対応しなければならず、履修者が多い場合は非常に煩雑になってしまう。学習内容の復習や追加は、むしろe-Learningが得意とする作業である。デジタル教材の内容の充実が必要だ。

7. より効果的な授業のために

上記6.1から6.3で、e-Learningと紙ベースの提出課題の長所、短所があらためて明らかになった。個々の学生が必要とする知識と技能を得るためにそれぞれ異なる項目を学習する場合はe-Learningが便利だが、現在のデジタル教材は内容や出題形式が限られている。それを補うためには印刷された提出課題が一定の役割を果たすことができるが、学生数が多い場合や学生のレベル差が大きい場合には対応しきれなくなる。

この問題の解決には2つの方向性がある。一つはデジタル教材の充実、もう一つは提出課題の内容を改善して教員の作業を効率化することである。

文法書や問題集では個人の既知情報と未知情報が同様に扱われているため、未知の事柄を見落とす可能性がある。しかしe-Learningによって、通過した項目を目で確認できれば、見落としも少なくなる。この機能が効果を上げるためには、知っておくべき情報がデジタル教材にすべて組み込まれている

ことが必要だ。現在のe-Learning用の教材は、「大学入試対策」「検定試験対策」などが多い。しかし、入門から上級までを網羅する教材から、IRT方式で個人の知識や能力に合った出題がなされれば、学生の能力差が大きくても対応できる。このようなシステムによって学生の格差を埋めたり、より厳密にレベルが判定できれば、対面も含め、より効率の良い指導ができるだろう。今後の技術的進歩によって出題形式などが多様になれば、e-Learningで扱える範囲が広がり、現在は紙ベースでしか提供できないコミュニケーション型な課題を扱うこともできるようになるかもしれない。

印刷した提出課題を用いる場合は、教員の負担を減らすために、学生に不足している知識や技能に集中して課題を設ける必要がある。e-Learningで扱う文法項目を細分化したり、過去の学生の成績や正答率を分析すれば、少ない問題数で、よりコミュニケーション型の確かな出題ができるはずだ。学生の質は年度によって多少は異なるが、積み重ねによってある程度の確さは確保できるだろう。実際、これまでの数年間に「学生が間違いやすい問題」が特定されてきており、問題数と評価の負担は減ってきているという実感がある。さらに今後は、オンライン受講の開始前に、オンラインの教材よりも下のレベルの知識や運用力をテストして、問題がある場合は、早い時期に、対面を含む指導をするほうが良いだろう。少数の学生のための負担としては決して軽くないが、早めに対処すれば、後の煩雑さを防げる。これは他の対面授業科目にも言えることだろう。

筆者が担当してきた科目は基礎的な文法を身につけることを主な目標としているが、実際には、かなり実力のある学生も履修していると思われる。履修者のレベルによるクラス分けができれば、課題レベルの問題は比較的簡単に解消される可能性がある。また、e-Learningの位置づけも考え直す余地がある。これまでは、印刷教材はあくまでもe-Learningを促したり補足したりする役割を担っていた。しかし、e-Learning教材のレベルに至っていない学生を対象とする場合は、対面や印刷教材を主とし、e-Learningはその補助や復習と考えるべきかもしれない。紙ベースを含む教材や対面指導によって、よりコミュニケーション型な課題に取り組み、その後e-Learningで復習する、という方式をとれば、オンライン受講の進捗は大きな問題にはならない。現在の学生の能力や性質に合わせて、これまでの授業方針を抜本から変える必要があるのかもしれない。

引用文献

- Azar, Betty Schramper, and Stacy A. Hagen. *Understanding and Using English Grammar (4th ed.)*. Pearson Education, 2009.
- Byrne, Garrett, and David Charlton. *Active English Grammar 3*. Compass Publishing, 2007.
- Fuchs, Marjorie, and Margaret Bonner. *Focus on Grammar 4: An Integrated Skills Approach (3rd ed.)*. Pearson Education, 2006.
- 小湊彩子 「「教訓帰納」を活用したリメディアル英語教育 間違いの見直しを促す実践の効果」『リメディアル教育研究』（早期公開）<https://doi.org/10.18950/jade.2017.10.31.01>、2018.5.5閲覧
- Muschla, Gary Robert. *Practice Makes Perfect: Exploring Grammar*. McGraw Hill, 2010.
- 根岸雅史、東京都中学校英語教育研究会（編著）『コミュニケーション・テストイングへの挑戦』（三省堂 2007）
- Robinson, Liana, Garrett Byrne and David Charlton. *Active English Grammar 6*. Compass Publishing, 2008.
- Schoenberg, Irene E. *Focus on Grammar 2: An Integrated Skills Approach (3rd ed.)*. Pearson Education, 2006.
- 田辺春美、松原知子、阿部陽子「WBTシステム「もも吉」によるe-Learning English科目の実践」『平成16年度学情報化全国大会』（社団法人私立大学情報教育協会、2004）：196-197
- 田辺春美、正岡和恵、村山敏勝、松原知子、阿部陽子「WBTシステム「もも吉」を利用した文学部英語教育の実践と効果—必修外国語科目「英語I、II、III、IV-CO」と選択科目e-Learning Englishの場合—」『成蹊英語英文学研究』10（2006）：149-179
- Ur, Penny. *Grammar Practice Activities: a practical guide for teachers*. Cambridge University Press, 2009.
- 若林俊輔、根岸雅史『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』（大修館書店 1993）
- 綿貫陽、宮川幸久、須貝猛敏、高松尚弘『ロイヤル英文法 改訂新版』（旺文社 2000）

成蹊英語英文学研究 第22号 (2018)

綿貫陽 (監修)、池上博『ロイヤル英文法問題集 改訂新版』(旺文社
2000)